参加者からの嬉しい声

書くで対話するとカベがなかった。

一枚の紙という同じ土俵で、断らんしゃないけど、コミュニケーションできるのが嬉しかったです。

模造紙だけでも楽しい!
本当に本当に楽しかった!新鮮な感覚!
声、手話ができない、らくがきチャットみたいだね
時間が足りなさすぎー!もっともっと対話したかった
席替えの時、離れるのがさみしいと伝えられたのが感動
心の壁というものを感じずに楽しく話せたと思いました
音声会話・手話なしということで、対等にコミュニケーションできた
いろいろな使い方があるんだなぁとコミュニケーションの奥深さを知った
手話なしで筆談でのコミュニケーションは初めてでいい勉強になった
手話を使わないでもコミュニケーションとれていましたね
垣根がないコミュニケーションができて感動しました
健聴者とのコミュニケーションバリアを感じなかった
このつみあげが変化をもたらす予感がします
皆、笑顔にあふれ心もすっきりした

・声がない
・手話がない
・文字だけ、心に届くとふしぎなあ!

ほんの短い時間だったのに離れがたい気持ちになりました。なぜ??またきます!

もっと向き合いたい もっと話したい そんな気分。

詳しくは中面へGO!

ゆっくり じっくり 話ができた

書いて伝わるってたのしいです!

また やって下さい。面白いです。広めて下さい。

石川県聴覚障害者センター施設長
藤平淳一さんの感想

私たちの不安に反して、第一回開催後の感想は「楽しかった」「障害の有無を気にせず盛り上がった」など、良い反応ばかりでこちらが驚いたくらいです。

書く、と言われるとどうしても「文章を書く」と思い込みがちですが、ルールの補足として「意思が伝われば文章だけでなく、一文字でも絵でもマークでも構わない」と説明されました。その説明通り、紙の上にはにっこり笑った顔の絵やハートマークなどが次々に書き込まれていったのです。

実験的な意味もあった一回目の盛況を受けて、二回目は参加対象を限定せず広く呼びかけました。結果、高校生から60代まで男女、幅広い年齢の方に参加してもらうことができました。一回目以上に、大いに盛り上がりました。「また参加したい」という声もたくさんありました。

ただ、日本語を不得手するろう者と聴者との間の垣根を低くするには、健聴者のある程度の理解力が必要だと思います。目には見えにくい障害であるだけに誤解を受けることも多く、聴覚障害について少しでも多くの人に理解してもらえる取り組みが増えてくれれば嬉しく思います。

アイ♡ラブコミュニケーション基礎用語解説

聴覚障害者の現状について

聴覚障害者とは、なんらかの原因による聴力損失で日常的にコミュニケーションに支障が出ている人々。ひとくちに聴覚障害といっても、補聴器等で音量を大きくすれば聞こえるようになる方もいれば、音を明瞭に区別できずことばが聞き取れない方、全く聞こえない方と、一人ひとり異なる不自由さを感じている。

聴覚障害により身体障害者手帳の交付を受けている方は33万8千人(H18年度厚労省調査)だが、日本の基準は両耳とも平均聴力レベルが70dB以上（大声で話しても聞こえづらい）と厳しいため、日常生活で不便を感じている聴覚障害者数は600万人以上と推定される。

聴覚障害者のコミュニケーション手段として手話をイメージされる方が多いと思うが、同調査では、補聴器・人工内耳の使用69.2%、筆談・要約筆記30.2%、手話・手話通訳18.9%、読話9.5%となっている。

手話通訳者とは

音声言語を手話言語に翻訳する通訳者のこと。また、手話には音声言語同様に国や地域による違いがあるため、音声と手話間だけでなく、異なる手話言語間でも手話通訳が用いられる。認定機関によって手話通訳士、登録通訳者などと呼ばれる。

要約筆記者とは

話の内容や会議の進行、講演の内容などの音声言語を要約し、リアルタイムで文字言語に起こす筆記者のこと。言葉だけでなく、音楽や拍手、チャイムの音などを筆記することもある。ノートテイクやＯＨＰ、ＯＨＣを使った手書きに加え、最近ではパソコンを使用することも増えている。

ワールドカフェについて

1995年に米国のアニータ・ブラウンとデイビッド・アイザックスが開発・提唱した“対話法”。

「知識や知恵は、機能的な会議室で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことができる『カフェ』のような空間でこそ生まれる」

という考え方に基づいたグループコミュニケーション手法。

情報の共有や考えを深化する機能が高いので、参加者どうしの相互理解が進み「個人の意見やアイデアをつなぎ合わせ全体としての一体感や納得感を得る」ことが出来るのが、最大の特徴。

ビジネスの現場では、組織風土づくりやリーダーシップ、組織開発研修の手法としても用いられている。

4～5名でテーブルを囲んで対話します

Hyakumangoku World Cafe

ワールドカフェの開催予定・お問い合わせはコチラまで!

公式サイト http://www.hyakumangoku.org/
問合せメール support@hyakumangoku.org
Facebookページ https://www.facebook.com/100m.worldcafe

NPO法人百万石ワールドカフェ
代表理事　坂本由美子（さかもとゆみこ）
TEL: 080-4361-7556　FAX: 076-244-3532

文:小杉 智美（コトバ屋conifer）　写真:塚本 茂樹（アンダンテフォトオフィース）　レイアウト:岩垣 豊(newpax)

© Hyakumangoku World Cafe 2014

2014-04-30

アイ♡（ラブ）コミュニケーション はじめて物語

一瞬で距離感が消えた…°°…

初めて対等に話せた気がします。

カベがなくなるね。（オープンマインド）

～I Love Communication Cafeが開催されるまで～

北陸労働金庫　NPO助成事業
主催　NPO法人百万石ワールドカフェ

はじまりの物語

社会的意義と意義

私たちは、フラットな関係性での対話の場をつくる団体として、活動4年目。

主にワールドカフェという手法で、多様な参加者から知恵や経験を引き出し新たなアイデアを生み、共感が一体感になり行動につなげていく場をサポートしてきました。

ある日、理事のひとりが「聞こえない人は、外見で判る障害ではないので、聞こえない事が周りに判りづらく、車がクラクション鳴らしても気づかないので日常生活が大変なんだよ」

その一言から、この事業がスタートしました。

コミュニケーションってなんだろう

フラットな関係って?

実現可能なの?

理解できる?

石川県聴覚障害者センター施設長
藤平淳一さんの不安

最初は「そんなことが実現可能なのか」という気持ちでお話を聞きました。

聴覚障害は、聞こえの程度や発症の時期、教育課程などによってコミュニケーション方法がまちまちです。 日常的に日本語を書く習慣のある人でも「てにをは」は苦手な人が多いことを考えても、聴覚障害者の特性を理解してくれているのか、健聴者との間で本当にコミュニケーションがとれるのか、随分と不安でした。

NPO法人百万石ワールドカフェ代表理事
坂本祐央子の不安

私自身、聞こえない人が周りにいないため、聞こえないってどういったことなのだろう?と、藤平さんにお会いして現状を伺ってから、急にこの事業への不安がむくむくと大きくなって来ました。

私が知らなかった「聞こえない事で起きる事態」「読み書きに関する現状」「手話通訳を通しての非日常な会話のやり方」等々。

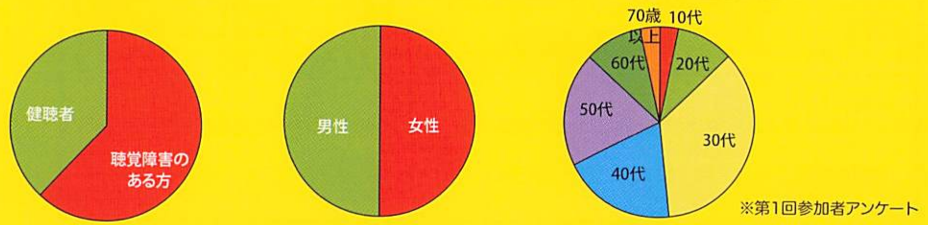
スタッフとの合宿の夜、今までとは違う場をつくる苦悩を仲間と共有するところから始まりました。

とにかくやってみよう!

目指すのは参加者みんなの笑顔! (^V^)

アイ♡コミュニケーションカフェにご参加頂いた皆様

第1回	2013年11月17日	参加者:36名、手話通訳者3名、要約筆記者4名
第2回	2014年3月30日	参加者:50名、手話通訳者3名、要約筆記者4名



※第1回参加者アンケート

オープニング

10:00

Start!
はじまり
はじまり～

何がはじまるのかわからず、固い表情

社会福祉法人
石川県聴覚障害者協会理事・事務局長
吉岡真人さんの挨拶
吉岡さんは金沢ボランティア大学校観光コースを修了し、現在は金沢観光手話ガイドを実践しながら活動中です。

インストラクション

10:10

ルールは4つ
主発言はホワイトボードに書く
できるだけ声は発さない(ファシリテーターはのぞく)
できるだけ手話を使わない(手話通訳者はのぞく)
主発言以外はテーブルに貼った模造紙に書く

スタッフが見本を見せます

練習しよう

練習中。うまくできた！

要約筆記(4名でチーム)

手話通訳(2名でチーム)
ファシリテータ

インストラクション

<会場レイアウトのポイント>
ファシリテーターと手話通訳者、要約筆記を映すスクリーン、インストラクションなどで使用するホワイトボードは全て近い場所に配置する。
→聴覚に障害のある人は主に視覚から情報を得ています。視線を集約することで情報の伝えもれがないようにするための配慮です。

10:30

ROUND 1

対話スタート

足並みそろえて
全員で1歩進む

最初はみんな緊張気味。椅子に深く腰掛けて、互いの距離も離れがちです。

大いに
盛り上がって
2歩すすむ

だんだんとペンが寄り添い合うように近づいていきます。互いの距離も、息づかいが感じられるほどに。

ホワイトボード
&
3色ペンゲット

対話に熱が入るほど、表情も豊かになり、身を乗り出してペンを走らせるように。

賑やかな静寂が広がっていく……

会場内は、50名以上が対話しているとは思えない静けさ。たまに、思わず零れる笑い声やどよめきが聞こえるだけです。それでいて、室内には楽しげな賑やかさが拡がっていきます。
「帰り際にあいさつを交わすまで、誰が聴覚に障害があって、誰が健聴者かわからなかった。考えもしなかった」という参加者もいたほど。

10:55

ROUND 2

メンバーチェンジ

赤いペンの上に青いペン、緑のペン、そこに貼り付けられる付箋。思いがどんどん重ねられていきます。

伝わるって
うれしい！
3歩すすむ

終わるのが
惜しくて
3つ戻りたくなる

参加者それぞれが感想を書いた付箋が次々に貼られていきます。どんどん貼り付けられ、すぐに隙間がなくなってしまいました。

模造紙に
感情があふれて
ちょっと一息

11:30

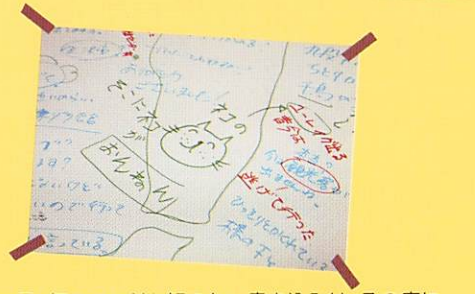
ハーベスト

両手を掲げてひらひらとふる仕草は、手話の拍手。星が輝いている様子にも見えます。

アイ♡コミュニケーションは終わらない物語

12:00

予定時間が過ぎても去りがたい様子の人が多く、話は尽きることがないようでした。思いの共有と共感を抱いたまま、時間を巻き戻したいと語った人も。



一見、何のことだか解らない書き込みは、その席にいた人たちが対話を楽しみ、気持ちを共有した証。描かれた線の重なりは思いが重なった証拠。

イベント終了後も、別れを惜しむ参加者が対話の続きや連絡先の交換をする姿が多くありました。
コミュニケーションの手段は筆談だけでなく、手話、読話(読唇)、発声など各々が普段使っているものも含まれています。例えるなら英語と日本語で話しているような様子ですが、心の壁がなくなれば、どんなコミュニケーション手法でも伝え合えると実感し、大きな可能性を感じられた瞬間でした。

アイ♡コミュニケーションを終えて

NPO法人百万石ワールドカフェ代表理事　坂本由美子

この企画をご提案させていただくために聴覚障害者協会を訪れた時、ここからが本題！と言うところで、手話通訳者が次の方と交代のために退席。耳の不自由な藤平さんと困惑した私が取り残されました。
私は手元のスケッチブックに青いペンで事業のゴールは「お互いを知り合う、共感♡」と書き見せました。すると、不安そうだった藤平さんの表情に、暖かい笑顔があらわれ、手でOKサイン！
その瞬間、距離がぐっと縮んだような嬉しさを感じて、握手を交わしました。
私は自身の体験で、気持ちを"文字と記号"で伝えることで互いの内側にある壁は取り払われる感覚を得たのです。事業の実施後、多くの参加者が、感情を文字にのせることで、距離がぐっと近くなる体験を味わいました。
今回は、通常のワールドカフェの手法に加えて、共通言語を口から発する言葉でも手話でもなく、「筆談」としています。加えて、ミニホワイトボードを使うことで参加を増幅し共感を呼ぶ工夫をしています。スライドの表示も障害のある方に理解しやすいよう言葉にも工夫を凝らし、場作りをしたことがフラットな関係で対話が出来る要素となっています。

この先、多くの方にこの手法で感情が伝わる嬉しい体験を共有して欲しいと願うとともに、この経験を通して災害時や困った時にも支え合う社会の一翼を担うキッカケになることを切に願っています。
まずは、私たちがサポートさせていただき、その先はいろんな地域でこの対話の場を地域の方がつくることが出来るようになるよう目指します。ぜひ、お声かけください。

Next Stage
次の会場で
お会いしましょう